



太白山

私は30代の後半に、太白山の麓、茂庭にある生出市民センターに社会教育主事として勤務していたことがあり、そのとき、郷土史を研究している地元の方々から、太白山について、様々な興味深いお話をうかがいました。郡山小学校の校歌の中に「夢遙か蔵王の峰よ」と歌われている蔵王連峰は宮城の名峰ですが、それより、さらに身近な仙台市太白区の象徴である「太白山」について、私が生出の方々からうかがった話を基に、その名前の由来（変遷）を中心にして紹介いたします。

「生出」は、元々は「オド」と読み、太白山のことを指していました。現在は「オイデ」と読みますが、地名は「茂庭」であり、「生出」という名称は、学校名や公所名、字名に残っているだけです。

アイヌ語で突起物や乳房を指す「ウト」という言葉があります。縄文時代には、アイヌ語と縄文語は同系語であり、乳房のような太白山を見て「ウト」と呼んだと考えられています。

当時は生出地区は海岸線に近く、その後、濁音訛のある言語を持ったチベット系民族が漂着したことが知られていますが、その訛から「ウト」が「ウド」と発音されるようになり、さらに、シュメール語系南インドのドラヴィータ族の漂着により、その訛から「ウド」が「オド」と発音されるようになったと考えられています。そのため、太白山は古くからオド山（オドガモリ）と呼ばれていました。

その後、奈良時代に入り、元明天皇の和銅6年（西暦713年）に出された、地名を漢字に改める勅令によって、「オド」を「生出」と表記することになり、漢字の音から「オイデ」と呼ばれるようになりました。現在「生出前」という字名がありますが、地元では「オドマエ」と呼ばれています。

生出山が太白山と命名されるのは、江戸時代になってからです。太白山の「太白」は宵の明星金星を指す中国名です。そして中国にも、全く同じ「太白山」という名前の山があります。中国の太白山は、仙台の端正な円錐状の山とはずいぶん趣を異にしており、高さも約10倍で、高さも形も全く違います。しかし、両者には共通することがありました。中国の太白山は、西安（唐の都長安）から見て宵の明星（金星）すなわち太白星がその山上に輝く位置、そして沈む位置にあるということから名付けられました。そのことを、佐久間洞巖という儒学者が「奥羽観蹟聞老誌」（1719年に完成した全20巻に及ぶ仙台藩の地誌）の中で記述しており、それに基づき、それまで「生出山（朴ヤマ・朴ガモリ）」と呼ばれていた山が「太白山」と呼ばれるようになりました。仙台の太白山も、仙台城から眺めると、金星（太白星）が輝き没する位置にあり、その位置関係（都と金星と山）が中国と同じだったからです。

現在、国道286号線が茂庭を通り山形に抜けるように、陸奥の国府多賀城から出羽の国府へ通じる古代の官道も茂庭を通っていました。その道が記録に現れるのは、吾妻鏡に「文治5年（1189年）、大木戸の戦いに敗れた藤原国衛（奥州藤原氏第3代当主藤原秀衡の長男）が笹谷峠を越えて出羽に逃げた」とあるのが最初です。そのとき、源頼朝は高館を攻略して名取川を越え、太白山の麓の旗立に進出してきたことが知られています。頼朝は一際高くそびえ立つ太白山を見て、周囲を見渡せる軍事上重要な場所だと感じたでしょう。そのとき頼朝によって鶴岡八幡宮を勧請して生出森八幡神社が祀られましたが、山頂にはそれ以前から、水神である貴船神社も祀られています。頼朝に従軍してきた関東の豪族である河村四郎秀清が、以後、太白山の守護職として茂庭を領することになったのも、茂庭が官道上の重要地点であり、また、太白山が、交通の目印や軍事上の展望台として、さらに信仰の山として、重要であったことによるものなのでしょう。

多くの歴史や伝説に彩られた太白山は、地元生出の人々にとってはもちろんですが、太白区に住む私たちにとっても、全仙台市民にとっても、郷土が誇る名峰なのだと改めて感じています。とは言え、私にとっては、ただ、幼い頃からいつも身近にあった、美しいふるさととの山です。それだけでも、これからも大切な心のふるさとです。郡山小学校の子供たちにとっても、将来どこに行っても、きっと、ふるさとを感じる大切な山になることなのでしょう。

..... 切り取り線
 子供たちのための、意見・提案・要望・校長に知らせたいこと など
2022年7月8日（ ）年（ ）組 児童氏名

※メールでも随時受け付けております。kosaki-k@sendai-c.ed.jp（校長直通）